

テーブルの向こう側から 補足資料 ～Vol.24～

2017年1月発行

TABLE FOR TWO(TFT) プログラムをご担当くださっている皆さまへ

日頃からTFTプログラム実施のため、多大なるご支援を頂戴しまして誠にありがとうございます。これまでアジア、アフリカでの学校給食の様子を「かわら版」としてお伝えしてきましたが、前号より「テーブルの向こう側から」という新しい名称でお届けしております。

TFTの活動は日本でのヘルシーな食生活の推進と、支援先での学校給食の提供が両輪になっています。「テーブルの向こう側から」では、支援先の様子だけでなく、日本国内のTFTプログラムご参加団体のユニークなお取り組みについてもお伝えしてまいります。

食堂をご利用される皆さまに親しんでいただけるよう、改良を重ねてまいりたいと考えております。皆様からのご意見や感想をお聞かせいただけますと幸いです。

<ケニアを視察訪問しました>

2016年10月に、TFT代表の小暮がケニアのルシंगा島とムファンガノ島を訪問しました。西部のビクトリア湖の島で、国内でもHIV/エイズの感染率が高い地域のひとつです。

TFTは幼稚園2園で給食を提供してきましたが、皆さまのご支援のおかげで、2016年からはルシंगा島の4つの小学校でも給食プログラムを開始することができるようになり、現在は毎日約1,800名の生徒・園児に給食を提供しています。

日本国内での活動状況のお知らせ

<世界食料デー「おにぎりアクション2016」のご報告>

10月16日の世界食料デーを記念し、10/11～11/30の期間中に、おにぎりの写真1投稿につき、アフリカ・アジアの子どもたちに給食5食を届けることができる「おにぎりアクション2016」を実施しました。**10万8,815枚ものおにぎり写真**が寄せられ、**約4,000人の子どもに1年間分の給食**を届けることになりました。

<http://jp.tablefor2.org/campaign/onigiri/>

2017年も「おにぎりアクション」の開催を予定しています。食堂や店舗で、おにぎりを通じたご参加のアイデアを募集しています。

<これまでに寄せられたご寄付> *TFT事務局に入金された寄付金額ベースで食数に換算

累計 4,454万2,961食分 (2016年12月時点)

東アフリカとアジアの6カ国（ウガンダ、エチオピア、ケニア、タンザニア、ルワンダ、フィリピン）で学校給食の提供と菜園・農業支援を推進しています。

Facebookページで情報発信中



www.facebook.com/tft.jp/

ケニア共和国 ルシंगा島・ムファンガノ島

ケニア北西部に位置するビクトリア湖のルシंगा島、ムファンガノ島の幼稚園2園と小学校4校で給食を提供しています。

ルシंगा島、ムファンガノ島に暮らす人々の多くは漁業に従事しています。観光産業も芽生えはじめていますが、現金収入につながる職業の多くは、ナイロビなどの都市部から移り住んだ人によって占められており、島民が恩恵を享受するには至っていません。

島民の多くはエイズによって家族や親戚を失っています。無計画な開発により土地が干上がってしまったり、湖畔の水質汚染により零細漁師の漁獲量が激減してしまうなど、様々な課題を抱えています。

様々な課題に直面する地域ですが、学校給食が子どもたちの栄養状態を改善し、教育の機会をもたらしています。



淡水湖に浮かぶ島でありながら、清潔な水の確保が困難



ウガンダとタンザニア、ケニアにまたがるビクトリア湖は、アフリカ最大の面積を誇る淡水湖です。しかし島民にとって清潔な水の確保は容易ではありません。

移入者が島の丘に家を建てる際、草木を伐採してしまい、雨が降るたびに泥水が湖に流れ出てしまいます。そのため湖畔の水は飲料には適さない水質になってしまっています。

島の無秩序な開発により、カバの生息域である湖畔の草地の除草が進んでいます。餌を求めて陸に移動するカバと人が出くわし、空腹で気がたったカバに襲われ死亡する事故が急増しています。



6人の家族を支える漁師のビンセントさん



ビンセントさんは、妻エミリアさん(24)、長女フィオナさん(6)、次女トレザさん(4)、長男マイケルくん(3)、乳児2人を養う一家の大黒柱です。

八畳ほどの家に台所とベッドが1つあり、一家全員が暮らしています。スペースが足りないため、子どもは床で寝起きしています。

ビンセントさんは自らの苦勞を振り返って「子どもたちには漁師だけにはなって欲しくない。問題がたくさんあり、稼ぎが少ないから。学校で勉強して、よい仕事を見つけてほしい」と語っています。



祖父母と暮らすエイズ孤児たち



ビクトリア湖の漁師の一部は、定期的に移動しながら漁場を探します。彼らが寄港中に繰り返す買春はHIV/エイズ蔓延の原因になっています。ルシンガ島・ムファンガノ島でも20~40代のエイズ発症率・死亡率が高く、エイズ孤児の多くは祖父母や親戚に引き取られて暮らすことになります。

祖母と3人の孫が暮らす家を訪問しました。両親も祖父も他界しており、庭で焼いた木炭を市場で販売するなどして生計を立てています。無計画な伐採や干ばつによって、島の木が減っているため、山の奥深くまで木を探しに行かなければならず、木炭の収入だけで家計を支えるのは困難です。



9割の子どもは家で朝食を食べずに登校



教室で子どもたちに「今日は朝食を食べましたか？」と問いかけたところ、9割近くの子もたちが、朝食を食べずに登校した、と答えました。

以前は空腹が原因で学校をやめてしまう子どもも多く、勉学を続けるためにも給食は大きな役割を果たしています。

親たちからは

「子どもたちに食べさせることの心配が減り、家事や漁業に時間が使えるようになった」

「自分は15歳で結婚して子どもを産んだが、娘にはしっかり勉強してほしい」といった声が寄せられています。



日替わりの給食メニューは両親が調理を担当

給食プログラム開始直後は、戸外の簡易かまどで調理をしていました。ルシंगा島では大きなかまどを3つ備えた給食室が完成し、幼稚園だけでなく小学校でも給食を提供できるようになりました。調理を担当するのは2名ですが、薪や水の調達に両親たちがボランティアで手伝いにきています。調理後には清掃を行い、食材や調理器具の盗難を防ぐために鍵をかけます。

給食室には月曜日から金曜日までのメニュー表が貼られています。トウモロコシやキャッサバ、バナナなどの主食に加えて、大豆や小魚などでタンパク質を摂取できるように工夫しています。

